

令和元年6月27日現在

機関番号：22701

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H06997

研究課題名(和文) 自助グループに通う当事者が認識するギャンブル依存症の回復のプロセス

研究課題名(英文) Process of recovery of gambling addictions recognized by parties attending self-help groups

研究代表者

桐生 敏行 (Kiryu, Toshiyuki)

横浜市立大学・医学部・助教

研究者番号：60805331

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,550,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ギャンブル依存症者の回復過程を明らかにすることを目的に、ギャンブル依存症からの回復者9名に対し、インタビュー調査を行い、その結果を分析した。分析の結果、【ギャンブルをせざるを得ない環境】、【ギャンブルへの欲求】、【失ったものへの後悔】、【ギャンブルを断った生活のための準備】、【失った信頼を回復】、【経験者としての助言】の6カテゴリが見出され、21の概念が抽出された。ギャンブル依存症者が、自身の疾患を受け入れ回復に向かうために、自助グループでの仲間との語り合いの場が必要であることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

Gamblers Anonymous(以下、GA)は、他者と自身の体験を共有することで疾患と向き合うことを可能とする。疾患への否認が強いといわれるギャンブル依存症にとってみれば効果的な回復方法である。またギャンブル依存症者はGAに継続して通うことでGAが安心できる居場所であることに気付き、相互に援助する役割を担っていることが明らかになった。GAとはじめとする自助グループの発展が今後のギャンブル依存症の回復に寄与することができる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the recovery process of gambling addiction. We interviewed nine people who recovered from gambling addiction and analyzed the results. As a result of the analysis, the environment that must be gambled, [the desire for gambling], [the regret for lost things], [the preparation for the life that refused the gambling], [the lost faith to be recovered], Six categories of Advice as Experienced Persons were found, and 21 concepts were extracted. It has been suggested that gambling addicts need a place to talk with their fellows in a self-help group in order to accept and recover their disease.

研究分野：精神看護学

キーワード：ギャンブル依存症

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

わが国では、ギャンブルによる多重債務から自己破産が急増している。借金による家庭崩壊、自殺という例は後を絶たず、ギャンブルに熱中するあまり、炎天下の車内に子どもを置き去りにするという死亡事故も多数報告されている。2014年に厚生労働省は、成人の4.8%(男性8.8%、女性1.8%)、推計536万人にギャンブル依存症の疑いがあると報告した。欧米のギャンブル依存症の罹患率が1~3%であることを考えればわが国の罹患率は高い傾向にあるといえる。

それらに対して、医療機関、回復施設、自助グループ、一部の精神保健福祉センターが回復プログラムを実施している。その中でも同じ問題を抱えた当事者同士が集まる自助グループでの治療が最も一般的である。代表的な自助グループとして、ギャンブラーズ・アノニマス (Gamblers Anonymous ; 以下、GA)が挙げられる。ギャンブル依存症者には、ミーティングの場でお互いの経験を分かち合うことが長期的な再発防止につながると言われている。GAはわが国に約150のグループがあり、各地でミーティングを実施している。一方で医療機関に関して言えば、ギャンブル依存症を専門的に治療している病院は30程度に留まるなど(和田;2013)、ギャンブル依存症者は医療機関に受診・入院すること自体が少ない。

ギャンブル依存症が社会問題になっている昨今、わが国ではギャンブル依存症の治療、社会復帰支援を充実させることは喫緊の課題である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的はギャンブル依存症者の回復過程を明らかにすることである。

## 3. 研究の方法

### 1)対象者

GAに1年以上通い、かつ過去1年以上ギャンブルを行っていない当事者分析の対象とした。またデータの偏りを防ぐために対象者の選定は同一地区を避け、1施設3名以下とした。

### 2)研究協力の依頼方法

研究協力者にそれぞれ、電話及びメールにて研究の趣旨を説明し、対象施設・対象者の紹介を依頼し、研究協力を得た。同意が得られた研究対象者に、口頭および書面で研究の目的・方法や研究への協力は自由意志であること、拒否により不利益は生じないこと、同意を得た後も研究途中の同意撤回が可能であることを説明した。

### 3)研究方法・質問項目

同意を得られた対象者に対し、個別の半構造化面接によるデータ収集を行い、得られたデータを分析した。質問の内容は、「対象者の属性(ギャンブルの経験年数、ギャンブルを断った年数)」、「過去のギャンブルの成功事例、失敗事例」、「ギャンブルをやめられなかった理由」、「自らギャンブル依存症であると自覚した時」、「回復のきっかけ」、「ギャンブルを断ち続けている理由」、「看護及び他の医療職への期待」、「家族及び社会への期待」とした。

## 4. 研究成果

ギャンブル依存症者からの回復者9名に対し、半構造化面接を行い、その内容を分析した。分析の結果、6のカテゴリが見出され、21の概念が抽出された。以下、【 】をカテゴリ、をサブカテゴリとしてストーリーラインを記述する。

【ギャンブルをせざるを得ない環境】の背景には、幼少期から親の依存問題、暴力、過度な期待など<親から受けた負の影響>を受け続けたことが挙げられ、未熟なストレス耐性から、家庭や職場・学校で受けたストレスに対し、<現実から逃避するための手段>としてギャンブルを用いていた。ギャンブルを繰り返すことでギャンブル資金は潰えるが、<イネイブラーの存在>により、ギャンブルを継続し、徐々に依存形成されていく。ギャンブルを断とうとして

も、いたるところにギャンブル施設があるなど<ギャンブルを行うに容易な環境>や未熟なストレス耐性のために、【ギャンブルへの欲求】に抗えない。

ギャンブルへの依存が強化される段階では、家族や友人に対して、<ギャンブルを続けたいがための嘘>をついてでも、ギャンブル資金を捻出し、<ギャンブルを継続>していく。たとえば他者からの助言があったとしても<疾患に対する否認>が生じ、自身の問題を逸らすために<他者への攻撃性>が生まれる。また、他の依存症疾患とは異なり<身体的には健康>であるために、ギャンブルを断つという動機づけは得にくい。さらにいくら借金を重ねても、過去のギャンブルに勝ったという経験から、<ギャンブルへの誤った認識>を抱くためにギャンブルを継続する。

しかしギャンブル依存症者にとって、今まで習慣化されてきたギャンブルを断つことは、<生きがいの喪失>を意味し、更にギャンブルを続けるために家族や友人に嘘をつき借金を重ねた結果、<多額の借金>ができ、それにより<人間関係の破綻>を招く。借金により財産を失ったこと、家族・友人への信頼を失ったことも含め【失ったものへの後悔】に襲われ、どうにも出来ない自身に対し<強い希死念慮>を持つ。

そこで今までのギャンブルを繰り返してきた生活と向き合うことで【ギャンブルを断った生活のための準備】が始まる。GAでは<同じ苦しみを持つものとの出会い>が生まれ、他者と自分の体験を重ね合わせることで徐々に<疾患と向き合う>ことができていた。さらにGAに通い続けることやギャンブルを断ち続けることで、【失った信頼を回復】していき、ギャンブルへの誘惑と闘いながらも<回復プログラムでの共有>による<仲間の支え>により、GA自体が<安心できる居場所>であることに気付き、【経験者としての助言】を同じ経験をしたギャンブル依存症者に<自身の体験を語る>ことで提供していた。

松本(2015)は、依存症のもとには人間関係の問題があり、共通した問題があると述べている。その共通の問題とは、「自己評価が低く自分に自信が持てない人」「人を信じられない」「本音を言えない」「見捨てられる不安が強い」「孤独でさみしい」「自分を大切にできない」ことである。すなわちギャンブルでの興奮・スリルを味わいギャンブルをやめることの出来なくなった人間が、ギャンブルのない人生を送ろうとすることは、根本にある人間関係の問題を解消することが必要である。本研究の結果では、ギャンブルによって失った信頼関係をGAに通うことで取り戻しており、同じ経験を持つ参加者と語り合える場が居場所となり、継続することで信頼を取り戻していく過程が明らかとなった。

田辺(2014)は、ギャンブル依存症の集団療法の経験の中で、物質依存と比べ、渴望の頻度が少ない反面、「(症状が)軽いのでコントロールできる」と誤解しやすく、いったんスリップすると同じ経過がより早く展開されると述べている。また他の依存症疾患でも見られる疾患への否認について、西村(2013)は「ギャンブル依存症者の否認も、依存症関連問題の進行過程で一般的に認められるものであり、飲酒や薬物への依存問題で生じる否認と変わりはない」と述べている。さらに西村(2013)は「ギャンブル依存症は、否認などの防衛機制が他の依存症問題を抱える人たちよりも脆弱で、防衛機制に破綻を起こしやすい」と述べている。また田辺(2009)が、ギャンブル依存症の集団療法の参加者に自殺企図や自殺念慮について質問紙調査を行った結果、概ね半数は自殺念慮の経験があり、全体の10%に自殺企図の経験があったと報告しており、本研究の対象者も当時は自殺を考えていたことを語っていた。海外の研究でも、ギャンブル依存症者の12~24%が自殺企図を経験していると報告されている(Raylu,2002)。すなわちギャンブル依存症者は自身の病状を認識しづら一方で、疾患の進行により、自死へのリスクが高まることが言える。ギャンブル依存症の理解をより充実させ、ギャンブル依存症者がより自身の疾患により気付きやすい環境調整が必要になろう。わが国では、徐々にギャンブル

依存症への理解が浸透しつつあり、その対応も増加傾向であるが、今なお不十分な状況である。ギャンブル依存症という疾患の進行は、ギャンブル依存症者のみならず、その家族の人生に多大な損失を与えることを意味する。ギャンブル依存症者が、自身の疾患を受け入れ回復に向かうにはギャンブル依存症の理解のみならず、新たな居場所となりえる GA を代表とした自助グループの存在も周知し、回復への情報提供をより活発にしていく必要があると考えられる。

#### 引用・参考文献

田辺等(2011):ギャンブル依存症(病的賭博)の治療的アプローチ-臨床体験から-,日本アルコール関連問題学会誌,13,24-28

西村直之(2011):ギャンブラーはうそつきか,日本評論社,p57-59

松本俊彦(2012):アディクションの概念-その理解と今日的な意義-,日本アルコール・薬物医学会雑誌,47,13-22

和田清(2013):我が国の病的ギャンブリングの現状と治療的アプローチ,依存と嗜癖 ,p155-166 ,医学書院,東京

Raylu(2002): Pathological Gambling. A Comprehensive review. Clinical Psychology Review,22,1009-1061

#### 5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

桐生敏行, 田辺有理子, 松下年子:ギャンブル依存症者の治療に関する海外文献のレビュー, 第17回日本アディクション看護学会学術集会, 長崎, 2018.9.2

Toshiyuki Kiryu, Yuriko Tanabe, Toshiko Matsushita: A Literature Review of the terms of recovery in self-help groups of gambling addiction in Japan, The 19th Congress of the International Society for Biomedical Research on Alcoholism (ISBRA), Kyoto, 2018.9.11

〔図書〕(計0件)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。